

【十勝農業 19～20年 回顧と展望】

ＪＡ酪農畜産、畑作対策組織トップに聞く

「取扱高最高 コロナ影響懸念」

2019年の十勝農業は春先の高温・干ばつなど天候に左右された面もあったが、畑作が小麦を中心に豊作基調となった。酪農・畜産も生乳生産を中心に堅調に推移し、農畜産物の管内ＪＡ取扱高は過去最高となる3549億円を達成した。昨年の総括と新型コロナウイルスの影響など今年の営農の展望について、2氏に語ってもらった。

◆十勝地区農協農産対策委員会委員長 (ＪＡおとふけ組合長) 笠井 安弘 氏

－昨年の畑作や青果の作柄を振り返って。

十勝全体で見ると酪農畜産が底堅かった。天候面の心配はあったが、生産量は畑作、野菜ともまずまずだった。ただ、ジャガイモは量がたくさん取れても価格が上がっていない。ニンジンも価格が飛ばずに終わった。小麦は前年が悪かったので数字は伸びたが、ビートは糖度が落ちた。作物によって個人差があったのではないかな。

天候は冬の間の積雪と、春の雨が少なかった。高温干ばつで、ニンジンなど早い作型のものは芽が出ても焼けてしまい、まき直しを強いられた。

－2020～22年の畑作物直接支払交付金の数量単価が決まった。

ビートの基準糖度は0.3度引き上がり16.6度となった。据え置きが望まれるが、計算式(直近の実績)からみて、そうならないだろうと思っていた。その点で道内選出の議員に頑張ってもらった。普通であれば大きく上がるものが0.3度の幅に収まり、ひとまず、ほっとしている。

－1月に日米貿易協定が発効された。

交渉した政府は影響を最小限に抑え「ウィンウィン」の結果と強調するが、勝負にウィンウィンはなく、どちらかが負けるものだと思う。政府発表を100%信じるのではなく、実際に始まってから、影響について動きを見ていかなくてはならない。

生産者への支援としては、補助事業の要件を緩和してもらいたい。人的要件が足りていない個人でも、気軽に補助を受けられるようにしてもらえれば。



－胆振東部地震など災害が多発し、気象条件も変化している。対応は。

発電機への対応は進んでいるが、正直、農協や個人でどこまでできるのかという問題もある。もう少し時間がたてば、作付けするもの

が変わるかもしれないし、十勝の小豆は風味がないと言われる状況がくるかもしれない。気象の変化には神経質にならなければ。

－人手の確保は。

可能な分野は機械に任せないと、やっていけない時代になる。外国人雇用についても、特に畑作や野菜は通年雇用ができず、簡単ではない。農家に生まれた人が必ず後継者になるとは限らないが、一方でその逆もあり得る。農家をやってみたいという人を連れてきて、取り組んでもらうことが必要だ。GPSによる自動運転トラクターなど、技術は進歩している。昔のように農家の勘がなくてもやれる時代になっている。

－今年の展望は

新型コロナウイルスが拡大しており、加工工場が止まれば、十勝産の原料が供給できなくなる。使い切れない原料が出れば、今年以降の生産にも影響するだろう。需要が減れば価格の低下も懸念される。たとえば小豆は増産方向だが、土産物や和菓子に消費が向かなくなることが心配だ。東京五輪での消費にも期待していただけない、狂ってしまった面があ